

## 子どもと一緒に成長します

近藤 恵里

東京女子医科大学女性医学研究者支援室

同 遺伝子医療センター

略歴：1991年	東京女子医科大学卒業
1995年	同 小児科大学院終了、小児科助手
2005年	同 附属遺伝子医療センターへ配転
2006年	同 女性医学研究者支援室特任助教

## 【自己紹介】

大学院での研究以来、筋ジストロフィーの分子遺伝学的研究に深い興味を抱き、小児科臨床に従事する傍ら、遺伝子診断技術・病態、治療法に関する研究に関わってまいりました。平成18年度からワークシェア勤務、フレックス勤務の支援をいただきまして、今年度は Duchenne 型筋ジストロフィーに合併する知能障害の分子機構の解明をテーマに研究を進めております。

家庭には11歳と7歳の二人の娘がおります。主人は当初から単身赴任での仕事を続けており、お互いの親も地方で暮らしているため、子育ては私がほぼ一人で(時々シッターさんにも手伝ってもらいますが)なんとかやっております。

## 【この支援を受けて】

子育てでフルタイム勤務ができない負い目で自然に医局から足が遠のいており、この支援で復帰を果たせるか、不安と期待を抱えてのスタートでした。まず嬉しかったのは、医局のみんながこの勤務体制での私をあたたく応援してくれたことです。気持ちが明るく、積極的になれたと同時に、責任感をもらいました。また、子育てと仕事の両立のジレンマで同じ悩みを抱え頑張っている(診療科の壁を越えた)仲間との出会いと、毎月のミーティングで他分野の研究報告にも触れられたことは、大きな励みと刺激になりました。ふり返れば子どもたちはこの2年の間にも随分成長してくれました。今では時折、私の方が子どもに励まされて仕事に向かうこともあります。女性医学研究者支援室と医局の方々に心から感謝して、今後もきちんと復帰を果たしていくとともに、これから支援を受けたいと思う方にも何かのお役に立てればと思っております。

## 【後輩女性医師たちへのアドバイス】

子育ては本当にかげがえのない時間ですし、手をかけようと思えばきりが無いくらいの大仕事だと感じます。でも一方、医師・研究者としての仕事を頑張り続けていく母親の一生懸命な姿を子どもに見せていくことは、それだけで(間接的に)大切な教育になるようにも思います(そう願っています)。

大変と思う仕事にも「できません」ではなく「やってみます」の気持ちが大事ではないでしょうか。感謝の気持ちを忘れずに努力してみる。失敗すれど素晴らしい出会いがあり、あるとき自然に成長している自分に気づけると思います。